



東洋史学専修（研究室紹介）

宮永，大瑚
生森，瑞季

(Citation)

神戸大学史学年報, 39:5*-7*

(Issue Date)

2024-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100491660>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491660>



東洋史学専修

宮永 大瑚・生森 瑞季

本稿では、神戸大学東洋史学専修の研究室紹介として、緒形康先生の学部ゼミ「東洋史演習」及び大学院ゼミ「東洋近現代史演習」の演習風景を取り上げる。なお、筆者は学部ゼミに参加していないため、学部ゼミの演習内容については、東洋史学専修学部四年生の生森瑞季が、大学院ゼミの演習内容については、二〇二三年度に博士課程前期課程を修了した宮永大瑚がそれぞれ執筆する。

(文責：宮永)

・東洋史演習(学部)

学部ゼミの東洋史演習は、中国語文献の輪読という形式で開講された。二〇二三年度の学部ゼミで取り扱われたのは、明清時期の「閉関鎖国」(日本の世界史教科書では、海禁政策として説明される)についての論文である。書誌情報は以下の通りである。

中国歴史研究院課題組「明清時期『閉関鎖国』問題新探」『歴史研究』3, 2022, 1-16.

この論文が主題とするのは、明朝と清朝で閉関鎖国が行われていたのかどうか、という問題である。アヘン戦争前の中国で閉関鎖国が実施されていたとする通説に対して、完全に閉関鎖国を行っていたわけではないという議論が展開されている。

学部ゼミは、論文の輪読を通して、学生が中国語を習得することを目的とした演習である。それゆえ、学部生同士の討論を中心として演習は進められておらず、学生が日本語訳でつまづいた箇所を緒形先生に適宜補足していただくという形式で演習が進められた。

筆者は、緒形先生のゼミに参加する以前は長文の中国語を読んだことがなく、履修した場合内容についていけ

るか不安を感じていた。しかし、翻訳する文章量を減らしたり、初心者向けの丁寧な解説をしたりしていただき、ゼミの中で取り残されることは全くなかった。緒形先生のゼミを1年間履修し、気が付けばゼミ参加当初では考えられない量の翻訳ができるようになっており、改めて中国語の読解力が鍛えられるゼミだったと振り返って感じている。

(文責…生森)

・東洋近現代史演習(大学院)

続いて、大学院ゼミの紹介であるが、大学院ゼミの受講者は筆者一人であったため、一対一で演習が行われた。ここでは、修士論文執筆に関係する漢文と英語の史料読解を筆者が行い、その日本語訳を事前に緒形先生に確認していただき、ゼミにおいて誤訳や疑問点を指摘していただくという形式で演習が展開された。筆者の都合に応じて、各回の史料が異なることがあったため、すべての史料をここで挙げることはできないが、主として以下の二つの史料を取り扱った。

『高宗実録』(国史編纂委員会「한국사데이터베이스」(韓国史データベース)「<https://db.history.go.kr/>」 二〇二四年一月二三日閲覧)。

FO (イギリス国立公文書館「The National Archives」<https://www.nationalarchives.gov.uk/> 二〇二四年一月二三日閲覧)。

それぞれの史料について簡単に説明しておく。まず『高宗実録』は、朝鮮王朝26代国王・大韓帝国初代皇帝であった高宗の治世における上奏文や詔勅などを、編年体で編纂した実録である。『高宗実録』は、国史編纂委員会や学習院大学東洋文化研究所がそれぞれ刊行しており、「韓国史データベース」では、国史編纂委員会が刊行したものが、原史料データ・活字データの両方で公開されている。高宗の治世における政府内の動向を知ることができる貴重な史料の一つである。

次にFOであるが、これは、Foreign Officeを略記したもので、イギリス国立公文書館所蔵の外交文書である。イギリス国立公文書館は、文書のデータベース上の公開(PDF形式)を進めており、筆者は、駐韓イギリス公使館からイギリス外務省への電報群(FO17/1660など)を活用した。

大学院ゼミを受けての感想であるが、筆者は漢文史料や英語史料を、適切に訳出し、論文で活用できるほど十分な読解力を身につけることができていなかった。大学

られたのである。

(文責：宮永)

院ゼミでは、二年間を通して、時には授業時間を延長して、丁寧な筆者の日本語訳をチェックしていただいた。また、どのような視点から史料を検討すればいいのか、緒形先生からアドバイスをいただき、修士論文に取り掛かるうえで励みとなった。現在でも漢文・英語の読解能力は十分であるとは言えないものの、入学当初と比較すると、読解力は確かに向上したといえよう。

また緒形先生には、読解した史料に書かれていることが事実であるかどうか、常に裏付けを行うよう、演習内で指摘をいただいた。史料批判の必要性は、歴史学では常に問われるところであるが、入学当初、筆者は十分にそれができているとはいい難かった。この演習での議論を通して、史料批判の訓練を行うことができた。大学院ゼミは、修士論文執筆のために必要なスキルを鍛えられる授業であった。

以上のように、学部ゼミでは現代中国語論文の輪読、大学院ゼミでは漢文・英語史料の読解が主として行われた。学部ゼミ・大学院ゼミに共通して言えることは、緒形先生から丁寧に指導していただくなかで、卒業論文・修士論文執筆に必要な語学力・読解力を鍛えられたということである。外国語の文献や史料を読解しながら、東洋近現代史の知見を深める風景が、緒形先生のゼミに見